慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	留学生のための「金瓶梅と好色一代男」
Sub Title	
Author	野沢, 素子(Nozawa, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.517- 520
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0517

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

にみちた手紙であり、だれもいぬ下宿部屋で読みながら私は首筋まで赤くして恥じいった。（この時も、問題になった英語は「特C」で三年生に進級できた）恥じいったが、性根はなおも懲りず、先生の手紙の中に、授業にでたとて文学がわかるものじゃないと言っているような応援のごときものをさえ勝手に受信し、「嗚呼哀哉」、卒業の年まで迷惑をかけつづけるのである。

かくもむさくるしく、わが師の恩を書きつづりながら、さらなる恩に今、思い到っている。それは、先生の自宅で試験を受けた時、「中国の文学は、面白くない」と、虚無の笑顔をつき破るようにして断言した光景である。私は、先生の笑顔の謎とともに、「面白くない」の意味を卒業してから二十八年、ずっと考えつづけていたように思えるからである。

六〇年代、勇敢なる中国文化革命批判で、先生は内なる虚無をさしおき、「面白くない」の有無の空間にあえて踏みこんだ姿は、壮絶無比だった。それは、中国文化革命をのりこえて、仙人になりきれぬ部分への先生のとりあえずの答えのようにも、遠くから思えた。だが、私の中では、先生の投じた「面白くない」の言葉は、「特C（ウルトラ）」なまでにいよいよ肥大し、今もって波紋の輪を拡げていくばかりである。たかが人生、感謝にあまりある。

（作家・昭和三十六年卒）

留学生のための「金瓶梅と好色一代男」

野沢素子

早いもので国際センターで日本語教育を始めてほぼ二十年近くになります。そしてこのところ日本語ブームとやらで、塾でも日本語を勉強する留学生の数が驚くほど増えていますが、わが中国文学科からは重松淳さん（旧姓大橋）、高地年さん（旧姓村田）等優秀な人材が日本語教育界に送り出され、国際センターでも多いに活躍して

おります。

ところで私達がいつも共通して頭を悩ます問題は、とかく無味乾燥になりがちな日本語の教材を、いかに血の通った生き生きとしたものにするかということです。そんな時に必ずと言ってよいほど私達の頭に浮かぶのが、あの思わず引きこまれて時間のたつのも忘れて聞き惚れた村松先生の講義でした。あのリズムと切れ味のいい魅力的な語り口を留学生にも味わわせたい、そのためにはとにかく先生のお話を録音させていたゞこうということになり、恐る恐るお願いをしたところ、快く承諾して下さいました。そしてテーマとしてお選びになったのが「金瓶梅と好色一代男」です。タイトルですでにご想像がつくように、その内容は文学における「色の道」の日中比較というようなところです。

お話はまず次のように始まりました。

「日本人と中国人は肌の色もほとんど同じですし、眼は黒いし、髪の毛も黒いというわけでよく似ているんですけれども、性格というのは、これはずいぶん違うように思いますね。日本人はどちらかといえば、どちらかというよりは、はなはだ純粋好みであって、そこへいくと中国人というのは、複雑な、複線的な考え方をする。よく儒教といいますけれども、儒教だけが中国人の思想ではないわけで、老壮思想もあれば、法家の思想もあり、いろいろなものを中国人の体質から生み出しているわけです。そこへいくと我々は、感性というようなものが中心になって、思想といったようなものはどうも生み出していない。感性ということになると、これは研ぎ澄まされるほどいいということになって、どうしても純粋さということが問題になるわけです。よく日本人が何でも道にしてしまうなどというのも、結局は、それであろうと私は思うわけですけれども、色の道なんていうことも、道にしてしまうわけですね。……」

無粋にもこの辺を「談話の構造」などという観点から見ると、日本語の特徴が随所に現れます。

例えば「……というわけで、……ですけれど……」、「……であって、そこへいくと……」、「……けれども……わけで、……わけです。」、「……ということになると……ということになって……わけです。」等々、中級レベルの学生が学習しなければならない談話の構想が興味深い話の中にふんだんに盛り込まれ、我々には恰好の教材ということになります。

さて話は弾んで色の道の比較が食物にまで及びます。

「これは食物に例えてみればいいかと思いますけれども、日本料理でごちそうというとすぐお刺身なんてことになりますけれども、それは刺身だっていろいろあって、鮪のお刺身もあれば、鰹の刺身もある、白身の魚でもひらめもあれば鯛もあるってんで、それぞれ味が違うといえば違うんですけれども、いずれも魚の肉であって、それが料理方がいろいろあるっていうんなら、これまた別ですけれども、醤油をつけて、わさびを少々きかせるっていうわけで、食い方は一通りであるわけです。」

何とこれだけの内容が全て一文につめこまれています。

「……けれども、……けれども……であって、……てんで、……けれども、……であって、……」等々。

日本語では、このようにして文がいくつも接続していくのだということを理解させるための、上級向けの応用篇というところでしょうか。その応用篇のさらに応用篇をもう一つ御紹介すると、

「そこへいくと、中国人の方の料理というのは、あの材料、この材料、それを集めて、料理の仕方が違う、油は使う、何を使うといったように、ラー油を使ったり、辛くしてみたり、しょっぱくしてみたり、いろいろにして八宝菜みたいにごてごてごてごてという、あの味、この味、その味と、色々の素材の味を総合して、どういう味を出すかというところに、どうも中国の料理の基本があるようですけれども、そういう点、日本人はそのものの味ということをよく言いますね。」

この辺になるともう日本人的に〝感性〟で理解してほしいなどと言いたくなるのは日本語教師としては失格でしょうか。

さてこの後、料理の比較がどのように色の道の比較とつながるかになるのですが、それは何となく、ご想像いただけると思うので割愛して、最後に今回録音させていただいた中で、村松先生の語り口を最も彷彿させられる一文を御紹介しましょう。

「金瓶梅の金というのは潘金蓮の金であるわけで、金蓮が最後まで西門慶にたたるわけですけれども、ともかく西門慶は内に一妻五妾あるんですけれども、そんなもんじゃ満足しなくて遊女を買いまくる、それだけで足りなくて、番頭の女房と通じる、そこには色々出入りがある、というようなことで連続していくわけですけれども、そうなりますと忙しいもんですから、金蓮はほっておかれる、つい欲求不満が生じる、そこへ体の具合が悪いっていうのに番頭の女房と一戦に及んで、ふらふらになって帰ってくると、金蓮が待ちかまえていて、相手がふらふらですからこれでは役に立たないというわけで、一粒飲ませれば効くという媚薬をいっぺんに三粒飲ませるということで、これが効きすぎちゃって、とめどなく精力が流れ出しちゃって、流れ尽くして精魂つきて、この西門慶という男は、一命あい果てるわけですね。」

この部分になると、文法や談話などと言う前に、教師自身がどこまでこの内容に肉薄できるかが問われるような気がして、我々一同すっかり自信をなくしてしまいます。血の通う、生き生きとした教材を目の前にして、日本語教師の道は遠いとまたまた思ってしまうのです。

（慶大国際センター教授・昭和四十年卒）